

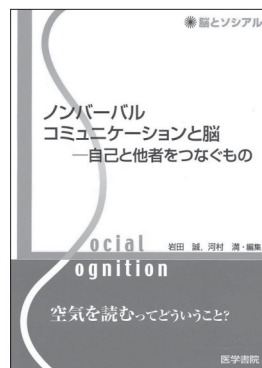


岩田 誠, 河村 満●編

『《脳とソーシャル》ノンバーバルコミュニケーションと脳—自己と他者をつなぐもの』

書評者

津本 忠治 (理化学研究所脳科学総合研究センター)



のっけから個人的な話であるが、小生、朝起きて真っ先にすることは、以前はテレビのスイッチを入れることだったが、最近はず電子メールを見ることとなっている。また、世の中では、すぐ隣の部屋の同僚に用件を伝えるのにドアを開けて顔を見ずに電子メールを使う人が多いという。

ことほどさように高度情報化時代では、人と人とのコミュニケーションは主に言語、特に文字情報によって行われるようになった。しかし、日本語でも「顔をうかがう」、「顔が広い」、「目顔で知らず」等々多くの言い回しがあるように、表情、アイコンタクト、身ぶりなどはコミュニケーションの重要な手段である。その重要性は、大脳皮質の中でも顔や視線に関与する領域の広さからも推測されよう。

上述のように、現代社会において高度情報化が進み文字情報に依存し、ノンバーバルコミュニケーション能力を使わなくなったことは人の脳の働きからみて大変不自然であり、今後、子どもの脳発達やひいては人格形成にいかなる影響を及ぼすか深刻に考えるべき点と思える。その意味で、自己と他

者をつなぐノンバーバルコミュニケーションとその脳メカニズムを詳述した本書の出版は大変タイムリーであるといえよう。

本書は計15篇の総説のいわばアンソロジーあるいは総説集であるが、神経内科学や神経心理学における碩学である岩田誠先生と河村満先生が優れた見識に基づいて編集されたものであり、その編集の観点は序とあとがきに対談として語られている。この対談は単に序文と後記ではなく、それ自身が非常に興味深い読み物となっている。したがって、各総説ではそれぞれの領域において気鋭の専門家が研究の現状をわかりやすく解説されているが、全体としては一本筋の通った読み応えのある本となっている。

上述したように、顔、あるいは表情によるコミュニケーションが人においては特に重要であるが、その意味でこの問題に関する7篇の総説が第1章にきているのは大変よい企画と思われる。特に、この章は、fMRI、脳磁図や近赤外分光法といった最新の手法を使った脳科学的研究のみならず、発達心理学や精神医学までカバーした総合

的な観点から編集されている点も特記すべきであろう。

第2章は主に身体の動きの解析から、扁桃体の機能、さらには他者の動作や意図の推測に関与するとされるミラーニューロンまで最近のホットなトピックスがわかりやすく述べられている。

第3章では、報酬系や意志決定の問題、さらには統合失調症、ビク病、心的外傷後ストレス障害などの臨床に関する問題が、社会性の障害という観点から紹介されている。また、最後に脳科学と社会との関係について、特に脳神経倫理についてこの分野の第一人者による解説がついている点は本書をユニークなものとしている。

以上、神経内科、神経心理、精神科、脳外科の関係者、あるいは高次脳機能研究者のみならず神経科学をめざす大学院生や学部生を含めて多くの人に本書を推薦したい。

A5 頁240 2010年 医学書院刊
定価3,780円(本体3,600円+税5%)
[ISBN978-4-260-00996-6]